

【研究ノート】

憂鬱の小説  
ボ〜っと、生きてんじゃねーよ！

増 田 辰 良

## 研究ノート

## 憂鬱の小説　ボくっと、生きてんじゃねーよ！

増田辰良

30数年も教壇に立っていると、学生たちの本性を知り尽くし、育てることを諦めている自分に気づくことがある。夫婦とて、同じこと。歳を重ねるごとに、並行感覚は崩れ、どちらかの精神力が弛緩しかんしてくる。教室と自宅には、嘆息を含んだ空気が淀んでいる。

今日も黒板に設問を書く。

『ラーメン屋。店主の目的は利潤を最大にすること。』

1日あたりのラーメンの需要(販売)量を、次の関数で表現する。

$$x = 500 - \left(\frac{1}{2}\right)P$$

ただし、Pはラーメン1杯の価格、xは販売量である。

作ったラーメンは完売し、ラーメン1杯を作る費用は400円で、総費用は販売量に比例するものとする。

店主はラーメンを何杯売れば、利潤を最大にすることができるのか。その杯数と利潤を計算せよ。』

書き終わって、振り向き、教室をぐるりと見回す。60数人いる学生たちは、それぞれの個性をいかんなく発揮している。うつむいたまま

一心不乱に、スマホを操作してはニヤニヤと不敵な笑みをこぼす者、

片肘を突いて窓の外へ視線を泳がせる者、上体を後ろに捻りだべっている者、腕を組んで目を閉じたまま正面を向いている者、そこには19、20歳の輝く顔はない。まるで牢獄を見るような殺伐とした風景が広がる。教師は看守そのもの。

板書を写しているのかと、最前列の男子学生に目をやると、無表情のまま、気だるそうにノートにシャープペンシルを動かしている。

覗き込むと、

「なんだあ？」

アニメのキャラクターを描いていた。

顔を上げて、ギョとした目を返してくる。

その目に、こちらの顔も引きつる。

「ノートを取りなさい」

思わず、語気を強めてしまう。

学生はにこりともしない。うるさい蠅はえでもおっぱらうみたいにかぶりを振った。

その右隣の女子学生にも板書を写すよう目力で指示をした。学生の眼差しがちくりと尖った。睨み返されると怖い。板書を写す者はいな

キーワード：憂鬱、学生、利潤の最大化、微分、認知症

いのか？ そうだろうな。しょうがないよな、退屈だよな。でも辛抱することを教えるのも教育だ、と自分を納得させる。

「いいか？ この問題を解くことによって、経済学がいう合理的行動の意味も分かるんだ」

誰も、こちらが期待する正しい反応をしてくれない。

女房は2人の息子たちが東京の大学へ進学し、家を出たころ「子育ては終わったわ」という安堵の言葉を口にするのがしばしばあった。それとほぼ同時に更年期障害の症状が出はじめて、精神的に不安定なときがあった。それをわたしが理解しないまま指摘すると、苛々がマックスに達したのか、「もうー、うるさい！ 離婚だー」と、声を荒げた。結婚後も後も温厚な気質であった女房の口から怒声を初めてぶつけられ、わたしは怯んだ。これが更年期障害か。

障害が治まると、ポッポッと物忘れの症状が出はじめた。それに遭遇するたびに、わたしは、「まだ子育ては終わってないぞ。しっかりしろ！」と、なじった。

その回数も次第に増えた。

「おい。お前なあ。立ち上がった瞬間に、俺が頼んだことを忘れているだろ？」

「いいえ。なにも頼まれてませんけど」

女房はしらっと言った。

「おい。しっかりしろ。大丈夫か？ 俺は5秒前にコーヒーを入れてくれ、と頼んだんだぞ。お前は、『コーヒーですな』と言って、立ち上がったんだ。台所へ入ったら、もう忘れたんだろ？」

「聞いてません。コーヒーなんて」

ちりでも払うみたいにあっさりと返された。

(11)

「おい。真剣に訊くけど、本当に、大丈夫か？ しっかりしてくれよ。最近、トンチンカンな受け答えばかりしているぞ」

「聞いてませんよ」

その声は怒気を含んでいた。

「忘れるのであれば、これからは筆談で伝えるようにしようか？ えっ？」

女房はムッと怖い顔をして、バターンと寝室のドアに音を出させて、隠れてしまった。

「こっちの身にもなってくれ。ちえ」

このところ舌打ちをすることが多くなった自分に気づく。

「いいか？ この需要関数は価格と需要量とが反比例の関係にある。これは先週、教えたよな。今日は、最初に利潤の概念を勉強するぞ。いいか？ 利潤というのは売上、あるいは収入から総費用を引いて残る金額のことだ。いいか？ 君たちは、アルバイトをしているだろうから、利潤の概念くらいは知っているだろ？ 教室であえて教えられるほどのことじゃない。しかし、注意すべきことがある」

窓際に座る女子学生は「注意」という言葉から逃れるよう窓の外に目をやった。視線の先には、テニスコートがあり、体育の授業で、学生たちがラケットを手に、型にとられないプレーをしている。

「アルバイト先の店長は利潤とは言わずに、利益と言っているだろ？ 厳密に区別すると、利潤と利益とは違うんだ。とくに、総費用の真中に違いが……」

テニスを観戦中の女子学生が上体を反らし、声を出さずに口を大きく開けて笑った。コートでは、ネットに足を引っ掛けて転ぶ珍プレーがあったようだ。そりゃあ、おもしろいよな。……こっちにすりゃあ、

大きな迷惑だ。

冷や汗をかかされたこともあった。キャッシュカードの紛失騒動。スーパリーのATMで現金を引き出した後、失くしたようで、遺失物として届いていないかどうか、スーパリーの担当部署と自宅とを数回、往復させられた。銀行の窓口で紛失届けと再発行の手続きをしているとき、いつも外出中に持ち歩いているバッグの内ポケットから出てきた。どうやら、財布にしまい忘れて、内ポケットへ落としてしまったようだ。

次に紛失したときは、うろたえた声で電話が職場にきた。

「落ち着け！ バッグの内ポケットをよく見てみる。見つからなければ、銀行へ行って手続きをしてこい」

わたしは受話器に怒鳴りつけていた。

帰宅後。夕食を作っているその背中へ声をかけた。

「お前、午前中にカードを失くしたって電話をよこしたけど、紛失の手続き、したのか？」

「カード？ カードならいつもお財布の中に入れてますよ」

「だからあ……お前が……電話をよこしたから。……忘れたのか？ 大丈夫かあ？」

「わたし、お父さんに電話なんてしてません」

「うくん……カード……俺が預かるうか？」

「どうして？ それじゃ生活費を下ろすのに不便です。いつもいつもわたしの所為(せい)にしないで！」

なにかミスを正すと、このように興奮した言動が返ってくるが増えた。

「お前が電話をよこしたから、確認しているんだ」

わたしの言葉は少し強かったかもしれない。

「もうー。なんでもわたしの……」

女房は、手にしていたキャベツの玉をシンクへゴトンと大きな音を出させて、落とした。

「そっかあ。あればいいんだあ」

わたしは自分が思っている以上に、怒気をはらんだ鋭い口調になった。

また、板書する。

利潤 $\parallel$ 売上(価格 $\times$ 数量) - 総費用(陽費用+陰費用)

「いいか？ この陽費用とは、会計費用とも言って、店主が麺をメーカーから仕入れる費用、スープを作る具材を仕入れる費用、さらに人を雇うとその人への給与支払い、光熱水道代などだ。陰費用とは、店主が自宅の一階を店舗として利用するとき、テナント料を支払っているとみなす費用のこと。それでえ、利益とは、陰費用を含まない概念のことだ。いいか？」

利益 $\parallel$ 売上 $\parallel$ 陽(会計)費用

こう板書し振り返ると、テニスを観戦中の女子学生の視線が突然、黒板に飛んできた。どの言葉(「含まない……」)に反応したのかな？ しばらく、黒板を睨みつけていた。

「経済学では陰費用をも含む利潤という概念を使う。いいか？ 機会費用(帰属費用)ともいうが……まあ、それはいいだろ。じゃあ、具体的に利潤を計算するぞ。おい！ この列の後ろから3つ目に座っている君(指でさし)君だよー。ずーっと、うつむいているようだけど、スマホをいじっているのか？」

男子学生は慌てて、スマホを尻のポケットに仕舞う動きをしてみせた。こういうツッコミを入れるのも重要な「娯(たのしみ)」である。今回は、

うまくハマッタ。やったぜー、とほくそ笑む。

「いいか？ ここでも注意が必要だ。在庫はないもの考える。仕入れたラーメンは完売するんだ。売れ残ると在庫にかかる費用を考えに入れなきゃならんので、面倒が生じる。いいか？」

面倒と聞いて、廊下側に座る学生たち数人が欠伸を押し殺したような顔付きをした。誰だって、面倒は嫌だよな。心の中で同情の声をかける。

ときどき、こちらが予測不可能な面倒事を起こすこともあった。

「おい。この木切れ、ゴミ収集所に置いてあったものだよ」

「いつまでも置いてあって、持って行ってくれないから」

「これは、うちが出したものでないぞ。お前、大丈夫か？ 他家が出したゴミを、持って帰るなんて……これは決められた寸法よりも長いから収集車は持って行かないんだ。ずっと置いてあることは俺も知っている。他家のゴミだ。元の場所へ返してこい。更年期障害が治まると、今度は痴呆か。堪らんなあ。今から、お前の面倒を看るってかあ。あくあ、俺はまだ現役で働いているんだぞ」

「いいか？ 経済学では、利潤を $\pi$ という記号で表現する。ギリシャ文字だな。その前に、 $x$ の式を $P$ について解く。

$$x \parallel 500 - \left(\frac{1}{2}\right) P$$

から、

$$P \parallel 2x + 1000 \dots (1)$$

そうすると、ラーメン一杯の価格の式になる。これを逆、需要関数という。

総費用は $C$ という記号を使うと、

$$C \parallel 400x \dots (2)$$

と書ける。

$C$ は $Cost$ の頭文字だ。 $C$ と $x$ は比例の関係にある。 $x$ が増えると、 $C$ も増える。減れば減る。その費用のもとで、店主は利潤が最大になるようドンブリの数を決めることになる。費用が制約になっているんだ。

すると、売上は $P \cdot x$ なので、 $P \cdot x \parallel 2x^2 + 1000x$ 、と書ける。これは二次関数だから、よこ軸に $x$ 、たて軸に $P \cdot x$ をとると、原点を通り、上に凸なグラフが描ける」

二次関数という言葉に多くの顔がうつむいたり、視線を逸らせた。

「そっかあ。二次関数、忘れたかあ。関数は分かるよな？ 右と左を

親密に関係づけているから関数というんだ。中学で習っただろ？」  
最後列にいる男子学生がニタニタ笑いながら右隣の女子学生に囁いている。

「そうだあ。その関係だ。よし。なぜ、二次と呼ばれるのか、教えてあげよう。掛け合わせてある文字式の個数を次数と呼ぶ。この式だと、文字式 $x$ が2つ掛け算してあるところ( $x^2$ )と1つ掛け算してあるところ( $1000x$ )があるよな。でも、この場合は、次数の大きいほうを見て、二次と呼ぶ。 $P \cdot x$ と $x$ が関数関係にあるので、二次関数と呼ぶんだ。で、(腕時計を見る仕草)今は3時5分前だな……」

誰も、シャレに気づいてくれないので、黒板に向かう。さっとグラフを板書し(グラフ1参照)、振り返ると、唇を尖らせて凸の形を作っている男子学生が、その唇を隣の女子学生の頬へ近づけている。それを女子学生はまんざら嫌でもなさそうに手で払って、笑っている。

「総費用は原点を通る一次関数として描ける」

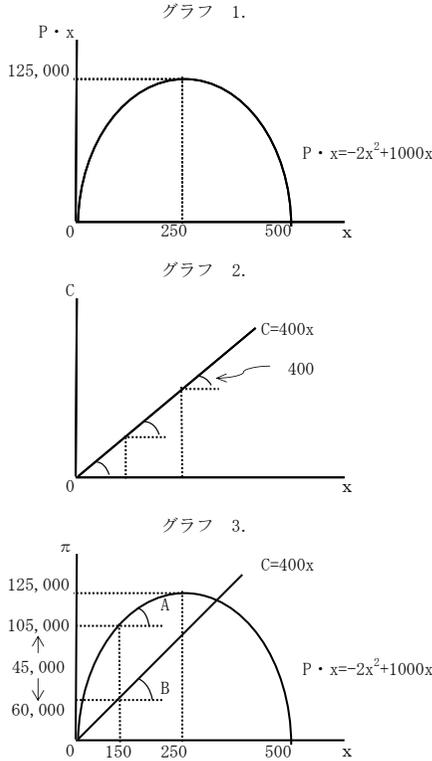
一次関数を書き込む(グラフ2参照)。

「この2つのグラフを重ねてその差、幅が一番大きいところが答えになるんだ(グラフ3参照)。二次関数の頂点じゃあないぞ。差、幅を見るんだ」

板書する手は動き続ける。

「いいか? 利潤を一本の式で書くぞ」

$$\begin{aligned} \pi &\parallel P \cdot x - C \\ &\parallel (2x^2 + 1000x) - 400x \\ &\parallel 2x^2 + 600x \end{aligned} \quad \cdot \cdot \cdot (3)$$



黒板に向けられている熱い視線を感じ、振り向いた。30数年も教師をしていると、背中に目ができる。こちらを見ていたのは教卓から真っ直ぐ下がった5列目にいる女子学生で、その学生は化粧用の手鏡を持ち一瞬、空白の顔をして鏡に見入り、髪の毛を梳かしはじめた。

「(無視しよう) さあ、黒板を見てくれ。いいか? 店主は、これが

最大になるxと、そのときのπの値を求めることになる。ここで、高校生のときに数学IIで習った微分を使うんだ。微分。1年生の基礎経済数学でも復習したよな」

「復習」と最前列の男子学生に声をかけてみた。

「松坂大輔が……リベンジです」

「……? いや、その復讐じゃない。が、松坂が流行らせたことは正しいぞ」

この瞬間、天井からダイヤモンドダストが降ってきた。窓際で、机に両腕を投げ出して突っ伏していた茶髪の頭が10センチほど撥ね上がった。

「そっかあ。心配するな。微分が分からなければ、二次式の平方完成という公式を使えばいい。これも高校1年のときに習っただろ? こうだったな。いいか?

放物線  $y \parallel ax^2 + bx + c$  ( $a, b, c$  はゼロでない定数) において、

頂点の座標  $\left[ -\frac{b}{2a}, -\frac{b^2 - 4ac}{4a} \right]$

軸  $x \parallel -\frac{b}{2a}$

見たことあるだろ? 忘れたかあ? ……忘れるよな」

「おい! 車庫の中へ、また木切れを持って帰ってきたんだな? ほんと、困ったヤツだな」

「いつまでたっても、雨にも濡れているのに持って行ってくれないか

ら」

「大丈夫か？ しっかりしろって。あれはうちが出したゴミじゃないって。あれほど言ったのに、もう忘れたのか？ うちにはあんな大きな木切れない。なぜ、持って帰ってくるんだ。さっさと戻してこい。放っておけば、出した家が気づいて、処分するだろうから。お前が心配することないんだ。他家のゴミを……。おい、大丈夫か？ お前の長姉さんは隣の町内に住んでいるよな。俺は徳島出身で、この地には血縁者は一人もない。分かるか？ 俺が頼れるのはお前しかないんだ。俺のためにもしっかりしてくれ」

このときはさすがに、わたしも考えさせられた。

「医者へ行って認知症の診断を受けるか？ ついて行ってやるぞ」

なにも答えず、女房は不機嫌な顔をして、寝室のドアにバターンと大きな音を出させて、隠れてしまった。自分の思いが通じないと閉じこもってしまう彼女のこうした行動は子どものころからあった、と亡義母から聞かされていた。彼女は3人姉妹の末っ子で、何かにつけて上の2人の姉が面倒をみてくれていたようだ。とりわけ女房より2歳上の次姉がその役割をしていたようだ。

こんな日常の一齣をその姉に話したことがある。妹思い(?)の彼女は怖い目をして一言返してきた。

「妹はあなたと結婚してから、こうなった」と。

えっ？ わたしが原因かい？ こりゃあダメだ。三食昼寝付きの専業主婦を許し、家族のために一生懸命働いてきたわたしの心情はこれっぽっちも理解されていない、察してくれていない。でも、身びいきする。これが血の濃さかな。

わたしはとっさに腹を決めた。もう一度、持って帰ってくれば、まず義長姉に相談しよう、気持ちの強い男勝りの性分をもつ次姉だから、

(六)

あんな対応をされたんだ、と。そう、ものには順番がある。まずは長姉だ。わたしは親に困り事があれば、長兄に相談するよう躰られて育ってきたではないか。がしかし、冷静になってこの考えを実行するのは止めた。

というのも兄弟姉妹にも色んなタイプがいる。女房が育った環境とわたしとは違う。わたしの姉ではない。甘えられない、甘えちゃいけない。2人の義姉に頼ることは大間違いであることに気づいたのだ。義姉妹には(悠々自適な)生活がある。面倒事は背負いたくないだろう。さらに言えば、妹の面倒事から遠ざかっていく義姉たちの心境や姿勢が見え隠れしていたからだ。『姉妹は他人の始まり』というではないか。頼らないことに越したことはない。わたしの女房だ。ギブアップしないよう自分で対処するしかない。最後は、赤の他人さんにお世話になる時代だ。

「こんな公式は覚えていられないよな。わたしも、みんなにこうして教えるときは、ノートを見ながら板書しないと忘れてしまっているんだ」

思わず、愛想笑いを洩らす。

「いいか？ だから、この公式を使わないで、微分を使うんだ」

今日、この言葉を発するのは4回目なので、衝撃には慣れたようだ。それでも天井からは風花が舞っていた。

こんなこともあった。

「保険会社から届いた書類は返送したのか？」

「書類ですかあ？」

「ああ、お前の確定年金の書類」

「いいえ、わたしは見てません。知りません」

「んんっ? 見てないことないぞ。どこへやったんだ」

「見てませんって」

「忘れたのか? 月曜日に届いて、内容を俺と一緒に確認したじゃないか? どこへやったんだ。大事な書類だぞ。えくと、その雑誌の下を見てみる」

女房は大儀そうに手を動かしてテーブルに積んである雑誌の間から、大型の封筒を見つけた。

「おお、それだ。かしてみろ。この申請書類をもう1度、説明してやるから、よく聞けよ。お前が入っている保険会社の10年確定年金は今年の8月まで保険料を払うことになっている。それで払い込みは終了だ。この10年間の払い込み総額は341万円。それでえ、今年から年金としてもらうことにすれば、毎年50万円が10年間もらえるんだ。だから、10年間もらうと、合計500万円もらえることになる。ただし、1年から5年まで据え置いて受け取ることもできるようだ。それだと、毎年もらえる金額も増える。これを10年分一括してもらうこともできると書いてあるぞ。一括だと、410万円。どうするんだ」

「……この先、何があるか分からないから、一括でもらおうかな」

女房は数秒間をおいて答えた。

「それだと、410万円マイナス341万円で69万円の得になる。毎年、10年間もらい続けると、合計500万円だから、500万円マイナス341万円で159万円の得になる」

「1年になおすと2倍も得するのね」

表情を変えることなく、言った。

「そうだな。据え置くほど得する分が大きくなる。今どき、300万円を10年ものの定期預金にしても、利子は100円も付かない。いい

保険に加入してたんだな」

「でも、10年間のうちにわたしが死んでしまったら、残りのお金はどうなるの?」

「その計算式は保険会社に聞かないと分からない。それから、この数値はあくまでも税込みの金額だから。これから税金を引いたものが手元に残るんだ」

「えっ?? 税金がかかるの?」

わたしの目を見て訊いてきた。

「ああ、一時所得とか雑所得としてかかる。確定申告もしなきゃならんかも? でも、お前は、専業主婦で所得はないし、まだ公的年金ももらっていないから……」

「やっぱり何かあると嫌だから、一括でもらっておくかな」

「じゃあ、申請用紙のこの一括の所に✓をして、保険会社へ返送すればいいんだ。早めに投函してしまえ」

「いいか? このグラフ3を見てくれ。(心の中では「頼む!」と叫んでいる) 2つのグラフの差、幅が一番広いところで $\pi$ は最大になっている。そのときのよこ軸の $x$ の値を求めてみるぞ。いいか?」

背後で、筆箱が落ちるガチャンという音が響く。スマホの着信音が低く鳴る。動揺は禁物だ。注意してはいけない。教師は、まるで電柱か標識のように学生たちから無視されている。

「微分はグラフの傾きを求めるものだから、デルタ記号 $\Delta$ を使い、よこ軸の変化 $\Delta x$ 分のたて軸の変化 $\Delta y$ がゼロになる。 $(\frac{\Delta y}{\Delta x}) \parallel 0$ 。だか

ら、二次関数の(3)式を $x$ で微分してイコールゼロとおけばいい。二次関数の山のとっぺんの傾きはゼロだからな。そのときの $x$ の値を

求める。イコールゼロ、ゼロに等しいと……」

ゼロに大きく反応して誰かの「あくあ」という溜息がこだまする。知識を脳ミソへいくら詰め込まれようとも蓄積しない。イコールゼロ。それに負けてはいけない。ここで長年、培ってきた忍耐力を発揮する。

女房はわたしの目の前で、確かに一括の所に✓を入れた。封筒は封をしないうまま、しばらくテーブルの上に置かれていた。

数日後。

女房は申請書類を出して、説明書を読んでいた。

その書類を見ると、またドラマが始まった。

「おい。どうしたんだ。一括でもらうんじゃないのか？ ✓の上に○を付けたり、横線を引いたりして、これじゃあ、一括を希望するのか、修正したいのか、書類を受け取る側は不審に思うぞ」

「あくあ。分かんないー」

女房は顔をふせて言った。

「『分かんない』って、この前、説明してやっただろ。何が分からん？ えっ？」

「あくあ。何がどうなっているのか、分かんないんだもん」

女房は両手で頭をかかえた。

「何！ 分からんことが、分からんってかあ。しっかりしろ！ そんなときは記入する前に俺に相談しろって。ボールペンで書いたから、消せない……。ほんと、大丈夫か？ ……大きな金額なんだぞ」

おのずと語気は強まった。

「……一括でもらうと税金がかかるんだっつたら……と思つてえ」

女房は泣きそうな顔をしていた。

「一時所得だから一回だけかかるんだ、きつと。決めたのなら、早く

(八)

投函しろって。いつまでも置いておくから、気になるんだ。しっかりしてくれよ。う〜ん……ほんと、大丈夫か？」

「いいか？ こうやって微分してイコールゼロとおく」

$$\pi' \parallel \left( \frac{\Delta \pi}{\Delta} x \right) \parallel -4x + 6000 \parallel 0$$

黒板に集中させよう。

「あなた、xについて解くと、xの値はいくらになる。答えられる？」  
身体を横に捻り、黒板のほうへ顔だけ向いている女子学生は眉間まげんにしわを刻んで、5秒ほどこちらを睨みつけてきた。そして、答えてくれた。

「何、それ。xはxなんじゃないの？ どうでもいいよ。そんなこと」

ちぎって投げるような言い方だった。xが19、20歳の脳ミソをかき混ぜている。学生は、あと少しでぶっちぎれるという獣の目を残して、そっぽを向いてしまった。

「(自分で解くのが手っ取り早い) ここから、x $\parallel$ 150となる。これが利潤を最大にする販売量、ドンブリの数となるんだ」

背後で、椅子に音を出させて、誰かが立ち上がった。それにつられて、数人が立ち上がる気配を感じる。いま、振り返り、引き止めると収監人数を減らせない。我慢だ。どうか、静かに脱獄してくれ。

黒板に、向ったまま手を動かす。

$$P \parallel -2(150) + 10000 \parallel 7000$$

「いいか？ このとき、ラーメン一杯の価格は700円となる」

「高いじゃん」

後列のほうで、誰かが声を上げた。

「そうかあ」

思わず、言い返してみる。

「学食だと350円です」

別の学生が答えた。

「いいか？ これは例題だから」

5日後。

「保険会社のSさんから電話があって、書類の件で……一括払いでいいのですか？ って」

「『いいのですか？』って、お前がもらう金だぞ。チェック欄をグジヤグジヤにして送ったから、不審がって確認の電話をくれたんだろ？」

「ああ。分かんないだもん」

「いいか？ お前がもらう金だからな。大丈夫か？ しっかり対応しろ。……じゃあ、今週の土、日のいずれかで自宅へ来てもらえ」

「こちらから電話をするの？」

「あたり前だ。Sさんの番号、分かるんだろ？」

しばらくして、また携帯の呼び出し音が鳴った。

「Sさんが土、日のいずれかに電話をくださいって」

「……？ 何！ 違うだろ。こっちがSさんに伝えるんだ。来てくれるよう。大丈夫かあ。しっかりしてくれ。言ったことが、なぜ伝えられないのだ……。ほんと、もうー。お前は、ボケか！」

腹立ち、わたしは電話を切った。

数分後、また呼び出し音が鳴った。

「Sさんの携帯の番号を聞きました。080-△△……だそうです」

「なぜ、俺が連絡をしなきゃなんんだ。お前の金だぞ。土、日のいずれかに……伝えたんだろ？ うろく……分かった。こっちから連

絡する」

こんなことが続いたので、わたしは女房の痴呆度を試してやるう、と思ったこともあった。が、そう思う自分に嫌悪を覚え試みたことはない。

やっところまで辿り着けた。ホッとする。後は、利潤を計算するのみだ。

案の定、Sさんは不審に思ったようだ。

「すでに書類は大阪の本社へ転送済みですが、手続きをストップさせています。一括のお支払いで、よろしかったでしょうか？」

「お世話になってます。すみませんねえ。チェック欄に○や横線を入れてあったでしょ。本人は税金のことが気になっているようです。すみませんが、一括でもらったとき、1年から5年まで据え置いたときの源泉徴収額を計算して、新しい申請書類と一緒に持って来てくれませんか？ できれば、この土、日のいずれかで」

帰宅後。

「おい。大丈夫か？ 俺は全部、理解しているけど、税金の額までは分からんから、この土曜日の1時過ぎにSさんが来てくれるから。聞きたいこと、疑問点があれば、メモしておけよ」

「さあ、これで最後だ。このxとPを(3)式に代入する」

$$\pi = 45000 \text{円}$$

「まとめると、答えはラーメン一杯を700円で150杯売って、最大の利潤45000円を獲得する。こうなる。いいか？ でもなあ、本当はここからが大事なんだ。グラフ3を見てくれ。Aの傾きは収入

曲線を微分したもので限界収入と呼ぶ。Bの傾きは総費用曲線を微分したもので限界費用と呼ぶ。つまり、利潤が最大になるときは、限界収入と限界費用とが等しくなっているんだ。分かるか？」

教室の空気は微動だにしない。教師の声は、まったく無視されている。理解するのは限界かあ。

「これを店主は合理的に行動した、という。費用という制約のもとで、無駄なく、損をしないように金儲けをしたということだ」

廊下側に座り、シャープペンシルを右手の指先でクルクル回していた男子学生の手が止まった。君はどの言葉（損をしない、金儲け）に感動したのかな？ここに居るよりもアルバイトへ行って、金を儲けたほうがいいに決まっているよな。ここに座っているだけで、君も費用を被っているんだぞ。これを機会費用っていうんだ。でも、そんな概念、どっちゃでもいいよな。

こんなことを理解する努力をさせても彼ら、彼女らには何んら益はない、と心の中で逡巡しつつも、大学2年生だから、これくらいは理解できることには……させないことには……。教育はアメとムチに加えて学生自身の自助努力がブレンドされて成果を生む。自助努力のされないまま、わたしは心を鬼にしたり、仏にしたりの連続である。幾つ人格を有しているのやら。自分を疑うことがある。

土曜日の朝。

「おい。今日の午後、保険会社のSさんが来てくれるから、聞きたいことをメモしておけよ」

「誰ですか？」

「『誰ですか？』おい。しっかりしろって！大丈夫かあ。保険会社のSさん、お前の年金の件だよ。忘れたのか？カレンダーを見て

みる、お前の字で「Sさん来る。1時」って書いてあるじゃないか。ほんと、脳ミソが減っていつてるよな。確実に、ボケてるぞ。毎日、決まった掃除、洗濯、炊事しかしないからボケるんだ。あえて煩わしいことを引き受けて、やれ。子供の頃から、親や姉さんに頼るばかりで、自分で意思決定をこななかったんだろ。脳ミソを色々使え。……なぜ、俺がこんな汚い言葉を口にしなきゃならんのだ。お前の所為だぞ。俺も4人兄弟の末っ子だけど、親父やお袋、兄貴たちには迷惑をかけちゃいけない、と自分に言い聞かせてやってきたぞ。俺よりも4歳若いお前を妹のように思ってた。そんな若いお前が俺より先にボケて、どうするんだ。しっかりしてくれってえ」

そして、1時。

「一括でお受け取りいただくと、税金はこの金額になります」

Sさんは穏やかな声で説明をはじめた。

「そんな額ですみますか？」

「はい。ですがあ、一時所得ですので、ここの金額が25万円以下ですと、確定申告をしても納税の必要はないですね」

「あっ。そっかあ。そんな課税最低額がありましたよね。おい。一括だと、この額の税金になるけど、納める必要はないそうだ。分かったか？」

横に座る女房に書類を見せて、確認させた。がその表情からすると、理解はしていないようだ。いや、理解をしようとはしていないようだ。

「じゃあ、毎年、もらうことにすると、どうなりますかね？」

わたしは書類をめくりながら訊いた。

「はい。毎年ですと、雑所得として扱われます。一応、据え置きも含めて、全パータンを計算してみました。3年目まで据え置いても納税しなくていいですよ。据え置くと歩合が加算され金額が大きくなりま

すので、4年目からは納税しなきゃいけません。4年目ですと、納税額は約2万3000円です。5年目だと、約2万6000円くらいですわね」

「なるほどお。そんなものですか？」

「(女房に計算例を見せながら) 3年まで据え置いても税金は払わなくてもいいみたいだぞ。逆に、据え置いた分だけ、もらえる年金総額は多くなる。分かるか? 税金を払いたくないのであれば、一括払いが3年までの据え置きから選べばいいんじゃないか?」

理解できたのか否か、女房は書類を見ても、うんとおすんとも反応しなかった。

「すみません。それから、彼女はもう一つ心配をされていて毎年、もらうことにしたとして、もし途中で死んでしまったら、その後の年金はもらえるのか、もらえるとしてその金額がいくらくらいになるのか……雀の涙ほどの一時金しかもらえないんじゃないかって」

「はい。残りの金額は配偶者様に毎年、支払われます。また、そのとき一括で残りの金額を受け取ることもできます」

Sさんはわたしを安心させるよう目尻を下げて答えてくれた。

「減額されることはないんですね」

「ないです。全額、支給されますよ」

「すみません。そういう契約条件って、このパンフレットのどこに書いてあります?」

わたしはパンフレットを差し出した。

Sさんはそれを手に取り、「ここですね」と言って、文章を読み上げた。

「あくあ。これですか」

小さな文字を覗き込む。

「おい、この文章だ。ここに書いてある」

わたしは女房に指先で示した。

「いいか? 板書したものを写すだけでは、理解できないぞ。君たちにとつて、経済学は数学と同じだから、鉛筆を動かして、板書した演算が正しいか、確認するんだぞ。黙って聞いていても、なんにも理解できていないようだからな。ポクッとしていても、ダメだ。いいか? よく、復習するんだぞ。復習が大切だ。復習に力を入れなさい」

誰かが、リベンジ、リベンジ、と呟く声が耳に届いた。

「いや、違うだろ」

言っても無駄かあ。

「どうするんだ。一括でもらってもいいし、1年から3年まで据え置いてもいいんじゃないか。据え置き後、お前に何かあっても俺が権利を受け継ぐわけだから……損することはない。こんなものは長く悩むもんじゃない。早く、決めろ」

「……じゃあ、1年据え置きにするかな」

その声は少しためらっているように聞こえた。

「それでいいんじゃないか。それなら、この欄に✓を入れて、ここに1と書いて、送り返せばいいんだ。もう分からないことはないな? これ以上は知らんぞ。……お前、衰えるスピードが速すぎるぞ。90歳手前のバアさんみたいだな。……若い頃は、活動的で色んな国を旅行して回るほどだったのに……。俺と出合ったのもテニスコートだったし……今は……」

「はい、はい、どうせ、わたしは……」

女房は、投げやりな口調で言い淀んだ。

「んんっ。チェックしたか?」

「はい。しましたよ」

まるでゴミをポイッと捨てるかのように言い放った。

「そっかあ、ちょっと見せてみる。(書類を確認し)よし。じゃ、明日、俺が投函してやるよ」

自分で書き連ねた黒板をじっと眺め、こんな方法で経済学という学問の深みが分かるわけがないと納得し、今日もなにかを考えるともなく考え始めている。

そうだ。19、20歳は無理をしない。数学や経済学とはまた別のなにかの感性が、教師の与り知らないところで日々小さな噴火を起こしている。その痕跡を、教師は一定の距離をとって、かろうじて見守るだけなのだ。そう。みんな立派な個性を持っている。教育をするとは、その個性を画一化してしまっているんじゃないか、と疑心暗鬼な思いをすることもある。放っておいても、みんな自分で生きていくだろう。教師が心配することなどない。大きなお世話だ。

翌朝。

これですめば良かったものを……。

「おい。弁当は？」

わたしは女房の背中へ声をかけた。

「いるのですか？」

女房はきよんとした顔で訊き返してきた。

『「いるのですか？」って、昨夜、』って言ったよな。カレンダ―にも書いてあるし、お前も確認していたし、メモも取っていたぞ。大丈夫か？ そのメモを見てみる」

女房の顔が一気に曇り、般若はんにゃの面と化した。

わたしはさらに追い討ちをかけるよう話してしまった。

「お前、2日前の弁当、メシしか入れてなかっただろ？」

般若の面が睨み返してきた。

「おかずを入れる容器にもメシが入っていたぞ。あの日は、学食へメシを持って行って、惣菜だけを買って食べたんだ。物忘れ……ひどくならないうちに自分でなんとかしろ。2人の姉さんが近くに住んでいるんだから、面倒を見てもらえ、遊びに行つてダベツてこい。お泊りさせてもらえ。子どものころは面倒をよくみてもらったんだろ。他人と話すのが一番いいんだ」

自覚をしているのか、女房はうつむいたまま、そっと目頭に手をやった。

わたしは言葉を選びながら、ゆっくりとした口調で続けた。

「他人と話す機会を作らないと、頭はドンドン衰えていくばかりだぞ。子供たちも独立しているんだから、お前も何か趣味を見つけて人生を楽しめ。毎日、買物に出るだけで、身体を動かさなから……。部屋で本を読んでも、それは読めないと思うぞ。何かを書けばいいんだけどなあ。何か始めろや。ポーツとしていても……俳句や川柳なんかどうだ。こうやって指を折りながら、17文字の文章を作ってみろよ。けっこう、脳ミソを使うから。川柳は形にとらわれないからいいぞ。どうだ、やってみろって」

女房は聞き終える前に、顔をしかめ、寢室のドアにバタ〜ンバタ〜ンと破裂音を出させて、隠れてしまった。いつもの仕打ちに、解けない問題を温めているような気分させられた。出口がないのは、わたしも学生たちと同じだ。近くに義姉妹はいても、助けてはくれない。そりゃあ、そうだろ、痴呆症っぽい妹の面倒など誰も看たくくないよな。

「あくあ。ちえ」

『教育は指導と自助で成果あり』

『教員の熱意を冷ます学力』

『姉 2 人近くにいっても行き来なし』

『陰で泣く亭主の気持ち知らぬ妻』

「みんなー、ちょっと早いけど、今日の講義はここまで。終わり！」

(了)

**付記。** 本稿は高村(2011)に触発されて執筆しました。主人公であるわたしの2つの環境(教室と自宅)における憂鬱感を同時並行的に描いてみました。学生たちのお頭と、認知症の始まりかけた女房のお頭とがドッコイドッコイであることを通して、わたしのやり場のない心中を伝えたかったからです。学生は教室から逃れられない。わたしは女房から逃れられない。

本稿の文体は私小説ふうになっています。個人が私小説を書き残すときの動機は何だろうか。私小説の私小説たるゆえんは個人の心情を吐露することです。吐露しなければ一歩も前進できない状況において、書くことによつて一歩前進できるのです。そんな一文を書き残したくて、本稿も執筆しました。執筆しながら、考えました。読書(本や活字を読むこと)の愉しさはどこにあるのだろうか。単に知識を得たり、感動を受けることだけではなくて、内容の曖昧さ難解さという両義性や読みの可能性を多く秘めていることだ、と思うのですが。想像力を愉しむ、ということでしょうかね。

**参考文献。**

- 石塚久郎(2014)『病』石塚久郎編『イギリス文学入門』三修社、380〜383頁所収。  
 菊池寛(2021)『マスク スペイン風邪をめぐる小説集』文春文庫。  
 キンマサタカ編(2021)『痛風の朝』本の雑誌社。

- 集英社文庫編集部編(2018)『短編アンソロジー 患者の事情』集英社文庫。  
 高村薫(2011)『田舎教師の独白』日本文藝家協会編『文学2011』講談社、57〜67頁所収。  
 日比嘉高編(2021)『疾病と日本文学』三弥井書店。  
 E.ヘミングウェイ、W.S.モームほか(石塚久郎監訳)(2016)『病短編小説集』平凡社ライブラリー。  
 W.C.ウィリアムズ、F.S.フィッツジェラルドほか(石塚久郎監訳)(2020)『医療短編小説集』平凡社ライブラリー。

